

海民の日本史2

日本神話に見られる海洋性

西川吉光*

はじめに

『日本書紀』や『古事記』で描かれた日本神話の主たる使命と関心事項は、日本の国土の支配者としての天皇家の正統性を歴史的に裏付けることにあった。それゆえ、物語の多くは政治性の強いストーリー展開になっている。しかしその中に取り込まれている宇宙・人類起源や国土創世説話をはじめ、神々の名の下で伝えられる口碑は日本民族が形作られる過程で大王家や各豪族等に伝承されていたものが多数取り込まれており、日本神話が日本及び日本人の起原を考える際の極めて重要な資料であることを否定するものではない。

ところで、記紀は天皇家の正統性を語る作品でありながら、皇孫は直接大和には天下らず、日本の南の端に近い日向に降ったと記述している。反対に、大和には臣下となる物部氏が同じ天孫統として既に降臨していたことを認めている。また天皇家の祖先が蛮族とされた隼人の祖先と兄弟関係にあったとしていること、日本書紀では一つの記述に留まらず多くの異説を取り上げていることなど、他国の建国神話とは異なり、日本神話は支配者側に都合の良い一方的な記述や構成にはなっていない。

この事実は、記紀編纂の当時、大王家がなお絶対的な支配権を持っていなかったこと、そのため多くの豪族の伝承を尊重する必要があったこと、さらに編纂の当時、それまでの伝承を無視し、大王家に都合の良い改竄や脚色、創作の手があまり加えられてはいなかったことを示している。つまり、記紀が伝える日本神話は、かつて津田左右吉が指摘したような政治的思惑からの創作話の集成などではなく、当時の豪族の伝承をきちんと記録に留めたものなのである。むろんそれは史実とは同義ではない。だが、語り継がれ言い伝えられてきた祖先の活動と移住の物語を後世に語り継ぐものであることは間違いない。日本の支配者が記した文献を頭ごなしにフィクションとして軽視し、反対に中韓等異国の人や王朝が書き残した海外の文献を一言一句あたかも真実の記録であるかのように扱おうとするのは均衡を失った学問姿勢である。

1. 日本神話の構成と特徴

記紀に記される日本神話は、ストーリーや登場人物の細部に異動があるものの、概ね以下の5つのパートから構成される点は共通している。

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

- ①天地創造国生み神話
- ②高天原～天孫降臨神話
- ③出雲神話
- ④日向神話
- ⑤神武東征説話

一般に神話の形式は、神が地上世界に至る経緯から垂直的神話と水平的神話に大別出来る。神が天から降臨し、天から降り注ぐ太陽を崇めるのが「垂直神話」で、神が大海原母の向こうから到来し、海の彼方の太陽を崇めるのが「水平神話」である。北方アジアでは垂直神話が、南方海洋性アジアでは水平神話が多く見られる。大陸は地続きであり、地の果てにもまた人間が住んでいることから、地続きでない空から神が来るストーリー展開が多い。一方、島国では繋がりのない遙か海の向こうあるいは海底から神が来るということだ。

日本神話の場合は、高天原から出雲、日向に天神が降る天孫降臨によって天上界と地上界を結びつけるストーリー展開になっており、垂直性を帯びているが、その一方、出雲、日向神話の中には、海の向こうの世界との接触の話が多く水平性が高い。それゆえ、説話内容の性格から分類すれば、日本神話は大陸北方的な垂直性と南方海洋的な水平性の混在融合型といえるが、神話全体に占める割合からいえば、極めて海洋性が高く、南方との関わりが強いものとなっている。以下、各神話の内容を紹介しつつ、その特徴の細部を眺めていきたい。

2. 天地創造神話

『日本書紀』の冒頭、天地が開けた始めには国土が浮き漂っていたと記される。天地（あめつち）の初めの時、国土がまだ若くて固まらず、水に浮いている油のような状態であったというのだ。その中に葦の芽のようなものが最初に生じて神になったと語られている。日本で本格的に水稲耕作が始まったのは弥生時代だが、最初の稲作水田は低湿地に営まれた。わが国に稲作をもたらしたのは、揚子江流域で活躍した海人・水人の系譜を引く人々である。彼らは湿地で漁業を行いながら、海や川を伝い各地に水稲耕作を伝えていった。この弥生人の生活空間こそ、記紀神話の冒頭で描かれている天地創造の原風景といえよう。

さて、『日本書紀』では最初の神として、葦の芽からクニトコタチノミコト（国常立尊）が生まれる。『古事記』では、アメノミナカヌシノ（天御中主）、タカミムスビ（高御産巢日）、カミムスビ（神産巢日）の「造化三神」と呼ばれる神々が最初に生まれ、その後にクニトコタチノミコト（国常立）を皮切りに天つ神が次々に出現している。こうして多くの神（「神世7代」）が生まれた後、しんがりに兄妹神、イザナキ（伊弉諾）とイザナミ（伊弉冉）が現れるのだ。

日本列島を創成したのは、神武天皇の7代先祖にあたるこのイザナギ、イザナミの男女神である。この2柱は兄妹であり夫婦でもある。誕生した時、この二神は「天の沼矛」という矛を手に「天の浮橋」に立ち、泥状の塩水をかき回して矛を引き上げたところ、矛先から塩の滴が垂れ、それが固まって「オノコロジマ」という初めての島になった。オノコロシマに降り立った二神は夫婦の契りにより地上を創造しようと、島を国中の柱としてイザナギは左、イザナミは右から回ったが

巧くいかない（一書では、最初の子供は不具の子供、蛭子（ひるこ）であったので水に流した）。それは禁を犯して女神の方から男神に声をかけたからだった。

改めて柱を回った後、今度は男神イザナギから女神イザナミに声をかけたので次の出産は成功し、女神は日本列島の島々、まずは淡路島、ついで本州（大日本豊秋津島）、四国（伊予）、九州（筑紫）、隠岐と佐渡、越（北陸）、大洲（周防か）、吉備子洲（児島半島、古代は島だった）の大八洲国（日本の国土）を生んだ。さらに対馬、壱岐やその他の小島が固まってできた¹⁾。日本列島創世の男女神イザナギ、イザナミは、風や波というその名前からも窺えるように、海に関連の深い神である。淡路島が日本で最初に生まれた島とされているが、記紀の国生み神話は、淡路島の海人たちの間に伝わっていた国生み伝承を源流として発達したとも考えられ、大和が瀬戸内文化圏をそのうちに取り込んでいたことが推測される。

ところで、天地が次第に形を整えてくる過程を、次々に現れる神々の名で暗示し、最後に天父神イザナギと地母神イザナミが出生して、この二神の結婚によって国土や万物や神々が生み出される日本神話のような類型をアメリカの人類学者ディクソンは系図型あるいは進化型と名付けたが、このような日本神話とよく似た話がポリネシアの南部、東～中央部、北東部、つまり、マルケサス諸島、ソシエテ諸島、ニュージーランド等で見られる²⁾。

国土を生み出した後は次に海と川と山、草木が生み出され、さらにイザナギ、イザナミは日神・オオヒルメノムチ（大日靈貴、一書にアマテラスオオミカミ（天照大神）、月の神（月読尊）、スサノオ（素戔鳴）を産み落とす。日神・オオヒルメノムチは光り輝き神神しかかったので、イザナギ、イザナミは喜び、天上（高天原）に送り出した。一方の素戔鳴尊は乱暴者で手に負えないので、根国に追いやられた。この後、一書の六や古事記では、イザナミは次々と島や神を生み続けるが、火の神カグツチ（軻遇突智）の出産時に死去する。イザナギは黄泉の国に行った妻に会おうとするが、蛆のわいた腐乱死体に驚き、逃げ出す³⁾。これは、呪的逃走モチーフと呼ばれ、北アジアからアメリカ大陸にかけて広がっているが、日本神話と一番よく似ているのは、中国の揚子江以南の地域のもので、異類の妻、あるいは妻の国や親族から逃げ出すという形式をとっている。元来は北方系の神話であったが、日本に入ってきたのは中国の中・南部からと思われる⁴⁾。

追いかけてくるイザナミから必死で逃れたイザナギは、死の穢れを清めるために川で禊をする。このときに『日本書紀』一書の六では、海の神である綿津見三神（底津少童命、中津少童命、表津少童命）や住吉三神（底筒男命、中筒男命、表筒男命）、安曇連の祖神（底筒少童命、中筒少童命、表津少童命）が生まれ、最後に顔を洗ったときに左の眼から太陽神であり天皇家の祖先神アマテラス、右目から月の神ツクヨミ、鼻から海を支配するスサノオが誕生し、アマテラスは神の世界である「高天原」、ツクヨミは青海原の潮流（一書十一では天）、スサノオは天下（一書十一では青海原）をそれぞれ支配せよとイザナギが命じ（3人の役割分担も異なる）るが、スサノオは母について行きたいと泣くので、イザナギは彼を憎んで根国に追いやってしまう。

3. 高天原神話

高天原は、アマテラスオオミカミ（天照大神）の住む天上界である。アマテラスは天皇家の祖先

とされ、天を照らす太陽神である。大王は「太陽の子」と称し、次期天皇候補を「日継ぎの皇子」と呼び、アマテラスの子孫であることをアピールした。彦の元来の意味は、この「日（の）子」であって、本来は男女の使い分けはない。卑弥呼も「日御子」であったろう。「アマテラス」は「天照らす」だが、古代語では「海」も「天」も「あま」であり、「アマテラス」は「海照らす」になる⁵⁾。世界の神話の中でも、王室開祖神が女神であるのは日本の天照大神だけといわれるが、天照大神も本来は女神ではなく、男神たる「海の神」であったが、持統天皇の時代に女帝持統のイメージを投影させる形で女神化されたとする説が有力である⁶⁾。

それはさておき、イザナギによって根の国に追放されたスサノオは、姉の天照大神に別れの挨拶をしに高天原へと上る。ところがスサノヲがすさまじい勢いで天地を揺るがしてやってくるので、スサノオの荒々しい行動に、アマテラスは天上の高天原を奪うつもりではと警戒。スサノオは悪意のないことを証明するために神意を問う誓約（ウケイ）をかわすことを持ちかける。誓約の内容は、アマテラスがスサノオの剣を、スサノオはアマテラスの珠（宝石）を互いに交換し、それをかみ砕いてそれぞれが男の神と女の神を生み分けること。アマテラスの球をかみ砕いたスサノオの口からは、オシホミミ（忍穂耳）をはじめとする5柱の男神が飛び出し、アマテラスが吹き出した剣のかけらから誕生したのが、宗像大社や厳島神社に祭られているタゴリ姫（田心姫）、タギツ姫（湍津姫）、イツキシマ姫（市杵島姫）の宗像3女神である。この誓約に勝利したスサノオは高天原でさらに乱暴狼藉を働き、怒ったアマテラスは天の岩屋に閉じこもってしまう。

そのため国中は夜のような暗闇に包まれてしまい、困り果てた八十万の神々は天安河辺に集い対策を練る。そしてオモイカネノカミ（思兼）が知恵を出し、常世の長鳴鳥を集めて鳴かせた。またタチカラオノカミ（手力雄）を岩戸の傍に立たせ、猿女君の遠祖アメノウズメノミコト（天鈿女命）が手に茅纏の矛をもち、天の岩屋の前に立ち一心不乱に舞い狂った。外の騒々しさを不審に思った天照大神がそっと岩戸を開けて外の様子を覗くや、すかさず手力雄神が天照大神の手をつかみ、外に引き出したのだった。

隠れた日神を物を見せたり鶏を鳴かせたりしておびき出すモチーフや、日月はかつて人間であってその下にも一人悪い弟や妹がいて、この悪い弟や妹のために日食や月食がおきるというモチーフは、中国南部から東南アジアにかけて分布しており、元来はモン・クメール（南アジア）語族の神話だったと思われる⁷⁾。こうしてスサノオは高天原を追放され、神話の舞台は、出雲国へと移る。

4. 出雲神話

スサノオの活躍や国譲りなど、記紀の中でも出雲神話の占めるウェートは大きい。だが、それが史実を反映したもので、この地方に強力な王権が存在していたのか、あるいは神話は大和王権における虚構に過ぎないのかについては、これまで見方が分かれていた。しかし、1984年から85年にかけて島根県斐伊川町の神庭荒神谷遺跡で358本もの銅剣などが発見された。さらに1996年には雲南市の加茂岩倉遺跡で39個の銅鐸が発見されるなど、大量の青銅器類の出土が確認された。こうした近年の考古学的成果により、弥生時代、出雲地方が北部九州や畿内と同じような先進地域であったことはいまや疑いのないところとなった。

『古事記』では全体の四分の一を出雲神話が占めるが、『日本書紀』の記述は古事記よりも簡単で、本文には八岐大蛇（『古事記』では八俣遠呂智）退治が登場してくるだけで、大国主神話は存在せず、ただ「一書の六」で、「大国主神と少彦名命との国造り」と「大三輪の神の祭祀起源譚」の二つが補足されているに留まる。『日本書紀』の場合、その性格上、後に天津神によって制圧されることになる国津神の栄光を語る必要がなかったためであろう。そこで、大蛇退治以後の展開は、有名な大国主神話が出てくる古事記に沿って外観しよう。

<八岐大蛇退治>

天上界から地上に追放されたスサノオが降り立ったところは出雲だった。山の中を流れる肥の河（島根県の斐伊川）のそばを歩いていると、年老いた夫婦と美しい娘が泣いているところに遭遇した。娘の名前はクシイナダ姫（奇稲田姫）。なぜ泣いているのかとスサノオは理由を尋ねた。もともと娘は八人いたが、毎年、越（福井県以東の日本海側）から八つの頭と八つの尾を持つ大蛇八岐大蛇がやってきて1入ずつ生け贄に連れ去ってしまい、最後の一人クシイナダ姫もまもなく奪われる運命にあるという。

八岐大蛇は真っ赤な目をし、体からは苔や檜が生い茂り、腹はあちこちただれて血を滴らせている怪物だという。スサノオは大蛇退治のために一計を案じ、強い酒をなみなみと入れた八つの桶を用意させた。やがて八岐大蛇がやってきて、それぞれの頭部がそれぞれの桶に入った酒を飲みはじめ、やがて八つの頭がみな酔っぱらって寝ているや、スサノオは十握の剣を抜き大蛇を切り刻んだ。

八岐大蛇を退治したスサノオは、蛇の死体から神剣草薙剣を発見し、助けたクシイナダ姫と結婚する。この神話は、勇士が毎年少女を犠牲に要求する怪物を退治し、救った少女と結婚する所謂ペルセウス・アンドロメダ型神話に属し、西はヨーロッパから東は日本を含むアジア各地まで広く世界中に分布している。なかでも、中国の長江以南から東南アジアにかけての地域の伝承が八岐大蛇神話と一番よく似ているとされる。

スサノオが得た草薙の剣はのちに日本武尊の代に天の群雲の剣と呼ばれるようになる。出雲神話で剣に拘った記述が出て来るのは、この地方のたたら製鉄と深い関係があるとの指摘が多い。八岐大蛇の体には苔や檜や杉が生えており、長さは八つの谷、八つの峰を渡るほどで、オロチは巨大な山脈を象徴しているかの印象も受ける。転じて、山間地で火を噴くたたら製造、あるいは砂鉄を採り、赤く染まった斐伊川の流れがオロチの姿に似ているとか、斐伊川の洪水反乱をシンボルしているなどの解釈も有力だ。

しかし、『古事記』では、大蛇の故郷は高志（こし）とある。高志とは、大国主神（ヤチホコ、オオナムチ）が妻問いをした高志の沼河日売（ぬなかわひめ）の里、『延喜式』神名帳の越後国の頸城（くびき）郡の奴奈川（ぬなかわ）神社のあたりである。ここが海人の根拠地であったことから推察するに、本来、ヤマタノヲロチは海に面した高志から出雲に来る龍蛇を象徴して、穀物霊のシンボルであるクシイナダ姫を生贄にする龍蛇、それは後述するように出雲地方を中心に日本海沿岸で交易にあたっていた海民の龍蛇や海蛇信仰に由来するものであったが、後にこの地方でたたら製鉄が盛んになり、製鉄のイメージが海蛇信仰に覆い重なっていったものであろう。

<大国主と国譲り>

さて、スサノオは子孫に出雲を譲り根の国に引退する。時は流れ、6代目の王子にオオクニヌシ（大国主）が登場する。オオクニヌシにはたくさんの兄弟神がいた。その数、八十柱と『古事記』は伝えるが、「八十」は実数というよりも「非常に多い」ことを意味している。出雲には未だ多くの独立勢力が割拠しており、その統一を図るためオオクニヌシは戦わねばならなかったのだ。あるとき、オオクニヌシと競争相手の兄弟神は、因幡（鳥取県東部）のヤガミ姫（八上姫）に求婚するために旅立つが、オオクニヌシの実力を嫉んだ兄弟は彼に荷物持ちをさせた。

身軽で先を行く兄弟神は、海辺の岬で皮を剥がされ赤い肌がむき出しになって倒れている兎を見つけた。兎はワニ（サメのこと）を欺し隠岐の島から対岸の本土に渡ったために皮を剥がされたのだ。「海で塩水につかってから、風の当たる場所で休むといい」と兄弟神の嘘の忠告を信じたウサギは、赤肌を塩に浸し悶絶する。そこに大きな荷物を背負ったオオクニヌシが通りかかり、真水で体を洗い、薬草を塗るよう指示した。オオクニヌシの教えどおりにした兎は回復し、もとの白い毛が生えてきた。兎はお礼に「先に行った神々はヤガミ姫を手に入れることはできないでしょう。選ばれるのはあなたです」と予言をした。この兎は神の化身であり、姫の夫にふさわしい人物を選定していたのだ。

この有名な稲羽の素兎（しろうさぎ）の話の源流は、南太平洋とされる。インドネシア、ボルネオ、ニューギニアとその周辺諸島、さらにはインドの周辺にまで広く伝承されている。弱小な兎、小鹿、猿、ジャッカルなどが、離島から海を渡って本土に来るために、ワニという強力な動物を騙して成功するストーリーである。

兎のいったとおり、ヤガミ姫は兄弟神の求婚を退け、オオクニヌシと結婚する意志を伝える。怒った兄弟神は引き返し、ヤガミ姫に会わせないように遅れてやってきたオオクニヌシを山へ拉致し、真っ赤に熱した岩を投げ落としたり、大木の楔を打ち込んだりしてオオクニヌシを殺害するが、その度にオオクニヌシは母の祈祷で生き返る。激しい兄弟心の攻撃を避けるため、オオクニヌシは紀伊の国に逃がれオオヤヒコに匿われるが、隠れていた巨木の洞が根の堅州国に繋がっており、先祖のスサノオと出会う。スサノオは6代後の子孫オオクニヌシを蛇の部屋に押し込んだり火を放ったりと責め立てるが、苦境を乗り越えたオオクニヌシはスサノオの娘スセリ姫（須勢理姫）と結ばれる。

地上世界に戻ったオオクニヌシはスサノオの武器で次々と兄弟を倒し、地上世界（葦原中津国）ははじめて一人の神によって統一された。その後、オオクニヌシは、海からやってきたスクナヒコナ（少名毗古那）の神と二人で力を合わせて国作りを進めるが、スクナヒコナは常世の国に旅立ってしまう。困ったオオクニヌシの下に「海を照らして寄り来る神」があった。その神は「自分をよく祭ってくれるなら一緒に国造りをしよう」と言う。どうすればよいのか尋ねると、「吾をば倭の青垣の東の山の上に齋きまつれ」と告げた。これは御諸山（三輪山）の上にいます神であった。こうした経緯で大国主神の和魂・幸魂として三輪山に祭られたのが大物主神であった。

一方、天から葦原中津国を見ていたアマテラスは、その豊かな上地を欲しくなり、息子のホシオミミ（忍穂耳）やアメノホヒ（天穂日）、アメノワカヒコ（天稚彦）らを地上に遣わし、統治させようとするがいずれも失敗。最後に派遣されたタケミカヅチ（武甕槌）とフツヌシ（経津主）は、武力の威圧でオオクニヌシに国譲りを迫る。自分では判断出来ないの二人の子供の意見を聞いて

欲しいと答えるオオクニヌシ。子供の一人コトシロヌシ（事代主）は国譲りに同意するが、もうひとりの息子タケミナカタ（建御名方）は同意しない。そこでタケミカツチはタケミナカタに力比べを挑み、信濃まで追いつめて同意させ、また諏訪から出ないことを約束させた。二人の息子が認めたことから、父のオオクニヌシも天つ神の神殿に負けない壮大な社（出雲大社）を作ることを交換条件に国譲りを認めた。こうして葦原中津国は、天孫降臨した神々に統治されることになる。

●日本海交易ルートを掌握する出雲勢力

以上、専ら『古事記』の出雲神話に沿って眺めてきたが、出雲神話の場合、記紀の記述の相違だけでなく、記紀と出雲風土記の記述も多いに異なっている。スサノオの八岐大蛇退治神話は、出雲を舞台とした神話であるにもかかわらず、記紀には登場するが、地元の『出雲国風土記』にはまったく登場してこない。オオクニヌシに関する一連の神話も同様だ。逆に、『出雲国風土記』では、記紀にはまったく出てこない雄大な国引き神話がストーリー展開の中心になっている。

即ち、『出雲国風土記』によれば、ヤツカミズオミツノノミコト（八東水臣津野命）は、出雲の地が狭いのでよその余っている土地を引っ張ってこようと考え、まず朝鮮半島の新羅の岬を、鋤を用いて切り分け、大綱で「国来、国来」と引っ張ってきた。それが杵築の岬であり、その時に使った綱が今の藪の長浜、杭が三瓶山である。同じように隠岐からも陸地を引っ張り、狭田の国、闇見の国を作った。最後に越（北陸）の都都の御崎から美保の崎を作ったという。

この伝承は、古代、出雲が朝鮮半島と深い繋がりを持っていたことを物語っている。新羅製の太刀が出雲の遺跡から出土しており、日本書紀では、高天原を追放されて出雲に降るスサノオが、まず新羅に天下ったという別伝がある（一書の四）。また出雲に渡ってヤマタノオロチを退治する際に使った剣を「カラサビ（韓鋤）の剣」と記している（一書の三）。出雲の朝鮮半島との深い関わりを指し示すとともに、国引き神話は日本海沿岸における交易ルートの存在をも窺わせる。日本海出雲交易圏の東部は国引きにあるように現在の北陸、越後付近にまで広がっていたのだ。

そもそも出雲大社や日御碕神社が所在する現在の島根半島は古代には東西60キロに及ぶ大きな島であった。宍道湖は島と本土の間を流れていた水道の名残である。古代の出雲は潟の発達した水上交通の要衝であったのだ。大和王権よりも早い1~2世紀頃、山陰から富山県を東端とする日本海沿岸のかなり広い範囲に、四隅突出型墳丘墓という出雲文化が広がっていた。オオクニヌシが結婚した女性の出身地を見ても、西は玄界灘の沖ノ島の宗像大社沖津宮に祀られるタキリ姫、東は新潟県のヌナカワ姫までと、出雲の勢力圏の広さが窺える。出雲のオオクニヌシが新潟にまで勢力を広げることができたのは、日本海沿岸が船でつながる文化圏だったからだ。一方、西は北部九州に繋がっていた。

「出雲の神庭荒神谷遺跡から出土した銅銚十六本は、すべて北部九州産で、これも両地域の関係を物語る。なかでも出雲と密接な関係にあったと考えられるのが、宗像の勢力である。崇神紀六十年の記事で出雲振根が赴いていたのも、宗像であったと思われる。出雲と宗像には共通点が多く見られる。ともに海人たちが活躍する地域であった。彼らが日本海を介して両地域の交流に寄与したと考えられる。宗像三女神のタキリビメ命は出雲に鎮座するスサノオ神の御子神であり、先に述べたようにオオクニヌシ神の後神となる。このような出雲と北部九州の関係は、両者がヤマト政権下に組み込まれる以前に、政治的な連携関係があったのではないかと推定されるのである。」⁸⁾

オオクニヌシの子供の名前「タケミナカタ」はタケ「ムナカタ」に通じる。彼の諏訪への逃避行も、出雲と越後、さらに信州との交流の深さから生まれたものではなかろうか。タケミナカタが祀られている諏訪大社では、有名な御柱とよばれる神事がある。白木の長い木を神社の四隅に結界として立てるもので、七年に一度（直近は平成二十二年）、急峻な斜面にその打となる樅の巨木をすべり落とす危険な祭「御柱祭・山出し」は、多くの観光客を集めている。この奇妙な神事がなにに由来するのか、定説はないが、古代、出雲大社が巨木の柱で支えられていた高層建築であったことが明らかになっている。巨木を立てることは海民による日本海文化圏の特徴であり、それは航海の導、つまり灯台の役目を果たすための建築物がその起源だったのではなかろうか。さらにエリアを広げれば、三内丸山遺跡の高層建築物との繋がりも興味深いものがある。

海民の社会では龍蛇の信仰が強い。出雲の地には今も龍蛇信仰が残る。出雲には毎年11月中旬、沖合から背黒海蛇がやって来る。出雲大社・佐太神社・美保神社・日御碕神社の神在祭では、その背黒海蛇がホンダワラ（玉藻）に乗せて神殿に納められる。スクナヒコナが去ったあと、大国主のところへ「海を光して依り来る神」とは、谷川健一氏の研究（『神・人間・動物』）にあるように、背黒海蛇であろう。そして、先に触れたように大蛇伝承も此処に起源があると言えよう。神無月の日本海に漂着する海蛇の故郷は日本列島西南の海であり、南西諸島には海蛇を神聖・特別視する伝承が今に伝わっている⁹⁾。

かように、大和王権が勢力を固める前の出雲は、海民が活躍する北部九州から北陸信越地方に至る交易ネットワークを掌握する拠点であったが、それだけに留まらず、出雲は近畿地方の内部にも移住者を送り込み勢力を伸ばしていた。大和の地に出雲の地名が多数存在しているのはそのためだ。『日本書紀』は、天皇家の日向への降臨よりも先に物部氏の祖先ニギハヤヒ（饒速日）が生駒の山に降臨し、大和の支配者になっていたことを認めている。このニギハヤヒとして語り継がれている人物やその一族こそ、大和進出を図った出雲の勢力であったと考えたい。やがて九州から神武の勢力が大和に入り込み、両勢力の間で衝突が起きたが、最終的には先住の出雲勢力は神武の勢力に服属を誓う。これが神武東征神話の基になった史実であろう。先住勢力の怨念を沈静化させ、崇りを防ぐ必要から、先述したように、大和の中心地である三輪山に出雲の神が祀られることになったものと推察される。

ところで、国引きをしたヤツカミズオミツノノミコト（八東水臣津野命）は、出雲風土記の中心をなす登場人物であり、朝鮮半島や日本海沿岸を往来していた海民たちの神であったと思われる。しかしヤツカミズオミツノノミコトは記紀には一切登場せず、その役目がスサノオに置き換えられたと見る向きもある。実はスサノオも、イザナギによって海を支配する役目を与えられており（『古事記』、『日本書紀』一書の十一）、水との関係が深い¹⁰⁾。大和王権の全国神（天津神）を地方神（国津神）に対して優越させるという政治的要請から、記紀における出雲神話の編纂においては、出雲在来のヤツカミズオミツノノミコトに代えて、国津神の頭目オオクニヌシの祖先神とするスサノオを起用し、出雲の独自性を押さえ込んだ可能性もある。

5. 天孫降臨神話

さて、国譲りが実現し、高天原から地上世界を支配するための使者が派遣される運びとなる。『古事記』によれば、アマテラスオオミカミ（天照大神）とタカミムスビ（高皇産靈尊）は、アマテラスの子であるオシホノミミノミコト（忍穂耳命）に命じて、地上の葦原中国を治めよと命じる。しかし、オシホノミミノミコトは地上はまだ安定しておらず危険が多いとして途中で高天原に引き返し、タカミムスビの娘であるヨロヅハタトヨアキツヒメ（万幡豊秋津姫）との間に、アメノホアカリ（天火明命）とニニギノミコト（瓊瓊杵命）という二人の子をもうける。オシホノミミが子のニニギが葦原中国を統治したほうが良いとアマテラスに献言したため、ニニギノミコトはアメノコヤネ（天児屋命）やアメノウズメ（天宇受売命）、イシコリドメ（伊斯許理度売命）、フトダマ（布刀玉命）、タマノヤ（玉祖命）の『五部神（いつとものおのかみ）』と群神を従え、八尺瓊勾玉、八咫鏡、草薙剣をもって天上の高天原から地上の葦原中国へと天下っていった。

ニニギたちが地上に降りる途中、行く手を阻んで天地を照らしている奇妙な神がいたが、女神のアメノウズメが何者かと詰問すると、サルダビコノカミ（猿田彦神）と名乗りニニギの道案内をしたいと申し出てきた。ニニギを主神とする群神はサルダビコに案内されながら、八重に光り輝いて棚引く雲を掻き分けて威風堂々と進み、三種の神器（鏡・玉・剣）を携えて筑紫（九州）の日向にある高千穂のクシフル嶽（久士布流多気）に降臨した。ニニギノミコトが日向の高千穂・クシフルタケに降臨したこの神話上の事績を「天孫降臨」という。

天神が、その子や孫を地上の統治者として山上に天降らせるというモチーフは、モンゴルのゲセルボグドゥ神話や古代朝鮮諸国の開国神話、北方ユーラシア遊牧民の始祖神話等と共通している。内容的にもよく似ているのは、朝鮮諸国の起源神話である。つまり『三国遺事』巻一に出ている檀君神話、『三国遺事』巻二に引かれた駕洛国記に出ている首露神話、『三国史記』巻一と『三国遺事』巻一にでている新羅の赫居世神話である。一連の類似からみて、日本の天孫降臨神話が朝鮮の建国神話と関係があることは疑いない¹¹⁾。

古朝鮮の檀君神話では、天神がその子・桓雄（かんゆう）に三種の神器のような「三符印（さんぷいん）」の宝器をもたせ、風師、雨師、雲師という三職能神を随伴させて、太白山の頂上の『檀』という樹の傍らに朝鮮国の支配者として降臨させたと伝えられている『三国遺事』。三符印の宝器は、天孫降臨神話の三種の神器に、三職能神はわが五伴緒に当る。また南朝鮮の六加羅国では、天降って国を治めて王たれと皇天から命ぜられて、同国の祖先、首露以下の神の御子たちが、卵の中に包蔵されたかたちで、聖峰亀旨（kui muri）に天下った開国神話（『三国遺事』所収の駕洛国記）が伝えられている（首露王の建国神話）。

類似点は神話の細部や表記にも及んでいる。タカミムスビの別名が高木神というように、檀君の名が木と関連することもその一つである。また日本書紀では、天下った高千穂の峰を「クシフルタケ」とするもの（一書の一）や「ソホリ」の山の峰とする（一書の六）ものがあるが、「クシフル」は朝鮮語の亀旨（クイムル）に、「ソホリ」は朝鮮語の都の意味の蘇伐（ソボル）、あるいは折夫里（seoul）に等しいとの説もあり、天孫降臨神話のストーリーや地名表記に朝鮮との高い類似性が見出されるのだ。

さらに、天孫降臨を命じたのはアマテラスと信じられているが、実際の記紀の記述を見ると、意

外にもアマテラスの勅命とするものは『日本書紀』一書の一だけで、多くはタカミムスビノミコトとされている（『日本書紀』本文、一書の二、四、六）。『古事記』と『日本書紀』一書二ではタカミムスビとアマテラスが並立するが、そこでもタカミムスビが主位に立っている。同じ高天原神話でも、スサノオとの駆け引きや天岩屋の話では主役であったアマテラスが、何故か天孫降臨の場面では存在感が極めて薄い。

これは、南方系由来の話が多い日本神話の中に、北方系の天孫降臨神話が入り込んだ恰好になっていることと無関係ではあるまい。天孫降臨の場面でアマテラスの影が薄く、天照大神と高木神の混在が見られるのは、農耕・太陽神の天照大神を柱とする南方系神話を抱く集団と、男神のタカミムスビを抱く北方アジア系と言う二つの集団が建国に関わっていたこと、即ち、朝鮮半島から渡来移住した北方遊牧系の集団が日本に天孫降臨神話を持ち込み、当初、異なる二つの系統の別の神話が併存したが、少数男系の半島渡来集団が数の多い南方系集団と交わり一体化していく過程で神話の融合化が進み、北方系神話が南方海洋系神話の中に溶け込んでいったものと考えられる¹²⁾。

南方系と大陸系の融和といえ、天下る手段が船になって入る点も同様だ。おそらく九世紀になって編纂されたと思われる『先代旧事本記』には、『古事記』や『日本書紀』にはない物部氏の系譜や神話載っている。物部氏の祖ニギハヤヒは、アマノイワフネ（天磐船）にのって河内の斑鳩の峰に天降ったという。このように、船乗が乗りこむ船にのって天降ったのであるから、ニギハヤヒの降臨には、航海のイメージがある。また、天孫降臨の神話にしても、出雲のオホナムチ（オホクニヌシ）との国譲りの交渉の使者のなかには天鳥船（アマノトリフネ）神が入っているし、ニニギが降臨するときに、「うきじまり、そりたたし」たことが『古事記』にも『日本書紀』にも記されている。これは浮き島ないし浮洲に立ったということらしく、ここにも天降りとは海をこえての移動という印象が伴う。日本の建国神話は、海とのかかわりが深いこと、また日本の国家形成過程に、海人たちが少なからず関与していたことが窺い知れるのである¹³⁾。

6. 日向神話

日向神話は、日本神話の中でも特に南方系、海洋的性格の強いパートである。

日向の高千穂に降臨した天孫ニギノミコトは、良き国を求めて吾田（あた）の長屋の笠沙の岬（鹿児島県西部）に進み、そこでオオヤマツミノカミ（大山津見神）の美しい娘カムアタツヒメ（神阿多都姫）、またの名をカシツヒメ（鹿葦津姫）に出会い求婚する。阿多は、大隅隼人と並び称せられる阿多隼人の本貫である。カシツヒメの「かし」は隼人の豪族の氏の称であり、この説話は天孫が海民である隼人の娘と結婚することを意味するものである。カムアタツヒメは一般にはコノハナサクヤ姫（木花開耶姫）の名で知られている。コノハナノサクヤヒメはニニギとの一夜の交わりで妊娠し、産屋に火をつけてから出産する。その時生まれた子供が、ホデリノミコト（火照命）、ホスセリノミコト（火須勢理命）、ホオリノミコト（=ヒコホホデミ）（火遠理命）の三柱の神々。兄のホデリは隼人の吾田の君の祖で、海での漁が得意、弟のホオリは山での猟が得意で、それぞれ海幸彦、山幸彦の通称で知られる。

ところで、コノハナノサクヤ姫を一目で見初めたニニギはすかさず父の山神であるオオヤマツミ

ノカミに使者を送り求婚したところ、オオヤマツミは快諾した。だがオオヤマツミは何故か、美少女コノハナノサクヤ姫だけでなく、ゴツゴツとした岩のように醜い姉イワナガ姫（磐長姫）も一緒に嫁がせた。嫁いできた姉妹のうち、ニニギは姉だけを直ちに実家に返してしまった。求婚したら姉までついてきたのは予想外だっただろうが、顔が醜いから返すというのもひどい仕打ちで、舅のオオヤマツミは恥をかかされたと怒り狂い、呪いの言葉を吐いた。

「私が娘二人と一緒に嫁がせたのには深いわけがある。妹のコノハナノサクヤ姫と結ばれば本の花が咲くように栄え、姉のイワナガ姫とともにいれば、あなたの命は雪が降ろうと風が吹こうと岩のように永久となる。それなのにあなたはイワナガ姫だけを返してきたのだから、あなたの命は花のように散るであろう。」

こうして天つ神の子孫、つまり天皇は永遠の命を失った。これが人類の寿命の起源となる。植物（花）と鉱物（岩石）との二者選択で、植物を選んだために寿命というものが生まれるという神話は、フレイザーによって「バナナ型神話（人間が石よりバナナを好んだので果実のように短命になったとする説話）」と分類され、東南アジア～南太平洋に広く見られる。

笠沙の御前で出会ったコノハナサクヤ姫に関する神話は九州南部の住民、おそらくは古史に隼人とよばれる種族のもっていた伝承であったろう。そして、コノハナサクヤ姫神話のあとに展開する日向神話にも、東南アジア等南方系統の説話や習慣が繰返し現れている。出産に当ってその殿に火をつけるというのもその一例だが、ここからは隼人族の南方との交流の強さが推察できる。

コノハナサクヤ姫が産んだ三男子のうち、長男のホデリ（海幸彦）は阿多君の祖、三男のホオリ・ヒコホホデミ（山幸彦）は皇室の祖とされている。ニニギ～ヒコホホデミ、そして次のイワレヒコ（神武天皇）はいずれも末子として系譜を繋いでいるが、末子相続は薩摩半島の習俗であることを、民俗学者は指摘している¹⁴⁾。

兄の海幸彦（ホデリノミコト）は海を支配し、弟の山幸彦（ホヲリノミコト）は山を支配していたが、ある日、弟は互いに道具を交換しようとして頼み、兄の釣針を借りて漁に出た。しかし山幸彦は魚に針を取られてしまう。兄は釣針をなくした弟を許さない。山幸彦は海岸で海神・シオツツノオジ（塩土老翁）から得た船に乗って、なくした釣針を求めて海の彼方の国へ行く。塩土老翁なる人物は、遠方の情報得を知る隼人集団の長に相応しいこと、また山幸彦が海神の宮に行く際に用いた無目籠も、竹製品を製作していた隼人との関係の深さを森浩一は指摘する¹⁵⁾。

海の彼方の国に着き、その入り口で様子を伺っていると人の気配がしたので、山幸彦は木の上に登って隠れる。やって来た娘が水を汲もうとして泉を覗くと、木の上にいる男の顔が水面に映っていた。こうして山幸彦はワタツミノカミ（海神）の娘トヨタマヒメ（豊玉姫）に出会った¹⁶⁾。山幸彦は海神の宮で歓迎をうけ、海神の配下の鯛の喉に引っかかっていた釣針も返してもらい、帰途につく。海神は兄を凝らしめる呪術を教え、水を呼ぶ珠を与える。一尋鰐（『古事記』原文では和邇と綴られるが、古代日本語の“わに”は鯨を意味したと思われる）の背中に乗った山幸彦は一日にして地上に戻り、呪術と珠の力で起こした洪水で兄を屈服させる。このとき海幸彦が示した屈服のポーズが後世、隼人族が朝廷に忠義を示す踊りの中に受け継がれている¹⁷⁾。

この海幸山幸神話は、インドネシアやミクロネシアの事例と類似する。そのため、隼人をオーストロネシア系と見る説もあるが、釣針喪失譚は、広く中国大陸水辺やインドシナ方面にも変種の伝承がみられるもので、大林太良は、江南地方の説話が南方と日本にそれぞれ伝播されたとの捉え方

をしている。

海幸彦が阿多君の祖ホデリとされたことは、海民ハヤトの性格に相応しい。後に蛮族とされる隼人が大王家と親族関係にあるとする記述は驚かされるが、山幸彦が海幸彦を支配下に治めていくストーリー展開は、南九州に移住してきた大王家の祖先が海民隼人と交流を持ち、その協力を得て、さらに自らの統制下に置き、秀でた航海技術を利用することによって東征が可能となった経緯を反映しているものであろう。薩摩半島は縄文、弥生期において東シナ海沿岸を利用した海上交通の中継地としての機能を帯びており、南島から北部九州、さらには瀬戸内海沿岸にまで活発な交易活動に従事していたのが、この地を拠とする隼人（阿多隼人）であった。隼人は、五島列島の白水郎、あるいは北部九州を代表する海人・安曇氏との強い繋がりも指摘されている。貝殻で文様を付けた市来式土器を残したのも隼人系の集団と考えられるが、広範囲に及ぶ彼等の行動力と高い航海術が東への移住を考える大王家には必要不可欠だったのだ¹⁸⁾。

さてホデリとの戦いに勝った山幸彦のもとにトヨタマ姫が訪れた。妊娠したトヨタマ姫は夫の山幸彦（ヒコホホデミ）を追って地上に来たのだ。彼女は男子ヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト（彦波瀲武廬茲草葺不合尊）を出産するが、出産の際、「子供を産むときは元の体になるので中を覗かない用に」と産屋から頼んだ。だが山幸彦はこらえきれず約束を破り見てしまう。トヨタマ姫は鰐の格好に変わって出産しようとしていた。産屋の屋根を鵜の羽根で全部葺きおわらないうちに、トヨタマ姫が産気づいて産屋に入ったことから、この未完成の産屋にちなんだ名がウガヤフキアエズである。この風習も江南文化（鵜飼は中国の漁法のひとつ）を継ぐといえる。恥じたトヨタマ姫は息子ウガヤフキアエズを残してワタツミの界（海神の宮）に帰ってしまう。代わって妹のタマヨリヒメ（玉依姫）を養育のため地上に送った。叔母が母親代わりになったのである。

残された息子はやがて成長し、養母であり叔母の玉依姫と結婚し、4人の子供をもうけたが、最後に生まれたのが、四男のカムヤマトイワレビコ、つまり初代の神武天皇であった。つまり、初代の天皇神武は、曾祖母（阿陀隼人の木花開耶姫）、祖母（海神の娘豊玉姫）、母（玉依姫）と海民や海神の女性の血統を引いているのである。神武東征の途次、熊野で船が波に翻弄された際、イワレビコの兄イナヒノミコト（稲飯命）が「嗚呼、我が先祖は天神、母は海神であるのにどうして我を陸に苦しめ、また海に苦しめるのか」と嘆いている。海神の子孫としての天皇家というイメージは、中世の奇妙な伝説にも残っている。天文元年（1532年）の『塵添整囊抄』（巻七）にのっている尾籠という言葉の語源説がそれで、応神天皇は海神の子孫だから竜尾があったという¹⁹⁾。

日向神話は、南方系に属する隼人の伝承を元に構成されていることは明かだ。隼人は朝廷に服属し、多くは畿内に移住し天皇に近侍する。後に南九州の地で8世紀頃まで朝廷に執拗に背く隼人は蛮族とされたが、そのような蛮族の祖と皇祖が婚姻関係にあることや隼人の神話を日向神話に採り入れていることは、単に朝廷による蛮族平定の武威を示すだけでなく、神武東征の際に必要な舟や航海技術の提供等大和王権成立に海民の隼人が深く関わり、大きな役割を果たした史実が投影されているのではなかろうか。

7. 神武東征神話

弥生時代も後期になると、稲作技術の発達と大陸からの渡来人の流入もあって、北部九州の人口が増大し、水田耕作地の不足が生じるようになる。そうしたとき、日本海や波穏やかな瀬戸内海がハイウェイとなって、多くの人々を近畿地方に送り込んでいった。その移住集団の長（おさ）の一人が、河内から紀伊半島を経て奈良盆地に入り、やがてその地を平定していった。後に大和王権と呼ばれるものの原初形態であり、長（おさ）は後に「神武天皇」と称されることになった。つまり、弥生後期における九州から畿内への移住の史実の投影が、神武東征神話、即ち、カムヤマトイワレヒコノミコトが良き地を求めて日向から大和へ東征し、橿原宮で即位して初代の神武天皇（カムヤマトイワレヒコホホデミノスメラミコト）となるストーリーである。

その発端は、ウガヤフキアエズの第4子であるイワレヒコ（磐余彦）（ヒコホホデミ）が45歳の年（神武紀元前7年）のこと、次のように語りかけるところから始まる。

「わが天祖がこの西のほとりに降臨され、すでに百七十九万二千四百七十余年経った。しかし、遠くはるかな地では、われらの徳もおよばず、村々に長がいて境を分かち、互いに争っている。また、塩土老翁に聞いたところによると、東の方角に美しい土地かあるという。四方を山に囲まれ、すでに天磐船に乗って飛び降りた者がいるという。私が思うに、その地は必ず大業を広め天下を治めるに適したところだろう。この国の中心に相応しい地に違いない。その舞い降りた者とは、ニギハヤヒ（饒速日）のことであろうか。そうであるならば、私がかの地に赴いて、都をつくらうではないか」。

こうして磐余彦はこの年の冬10月5日、諸々の皇子らや舟軍を率いて東征に向かった。『日本書紀』に記された東征のルートは、日向→①速水の門（豊後水道）→②豊国の宇沙（大分県宇佐市）→③筑紫の岡田宮（岡水門）（遠賀川河口付近）→④阿岐国の多祁理宮（広島県安芸郡府中町）→⑤吉備の高島宮（岡山市高島）→⑥浪速の渡（大阪市東区上町台地の北端）→⑦白肩の津（枚方市日下町）となっている。そして、白肩の津から竜田に向かったが、道が狭く険しく進むことができなかったので、引き返して生駒山を越えて大和に入ろうとした。だが、奈良盆地の先住の支配者だったナガスネヒコ（長髓彦）にクサエノサカ（孔舎衛坂）で迎え撃たれ、磐余彦の兄のイツセノミコト（五瀬命）が負傷する。「自分は日神（アマテラス）の子孫であるにも拘わらず、太陽に向かって敵を討つのは天道に逆らうもの」と考えた磐余彦は、背中に太陽を負い日神の威光を借りて敵に襲いかかるのがよかろうと判断し、一旦撤退し南に迂回する。途中、五瀬命は紀国の亀山で亡くなり、さらに磐余彦らの乗る舟は暴風雨に遭遇し、熊野の荒坂の津に漂着した。

上陸後、女賊の毒気に襲われたものの、タケミカツチの神から下賜されたフツノミタマという名の剣をタカクラジ（高倉下）から受け取り、体力を回復した磐余彦の一团は八咫鳥の先導を受けて熊野から大和入りを目指す。その行程は記紀で異なっており、『日本書紀』では紀伊山地を山越えて宇陀に入るが、『古事記』では、紀ノ川の上流、川の名前が吉野川と変わる五條市あたり（奈良県宇智郡）に進み、そのあと吉野を経て宇陀に向かったとしている。各氏族に伝わる伝承が微妙に異なっていたためと思われるが、経路はともあれ、磐余彦の集団は、宇陀のエウカシ・オトウカシ（兄猾・弟猾）、吉野のイヒカリ（井光）、国栖（くず）のイワオシワケ（磐排別）、国見丘の八十梟帥（やそたける）、磯城のエシキ・オトシキ（兄磯城・弟磯城）などの土豪勢力を次々と倒

し、あるいは誅殺していく。

さらに磐余彦はトミ（鳥見）の地で宿敵長髓彦と対決する。この時、磐余彦の弓の先に金色の鳶がとまり、その光り輝く様に幻惑されて長髓彦は戦力発揮を妨げられた。長髓彦は磐余彦が天神の子と聞き自分の妹婿ニギハヤヒ（饒速日）も天神だと述べ、その証しの天羽々矢（あまのははや）と歩鞞（かちゆき）をみせるが、磐余彦にも同じものがあり驚く。だが戦いを止めない長髓彦を饒速日命が殺害して磐余彦に帰順する。かくて大和を平定した磐余彦は、畝傍山の東南、橿原の地で初代天皇の位に就いた。『日本書紀』によれば、磐余彦が神武天皇として橿原宮で即位したのは紀元前660年辛酉の元旦。ニニギの天孫降臨から179万2470年余が経過していたという。

ところで、神武の東征に関する記述で幾つか奇妙な点がある。まず宇佐を出た後、筑紫の国の岡水門（古事記では岡田宮）に遠回りして立ち寄っていることだ。記紀のいずれもそのように記述している。日向を発ち豊予海峡から瀬戸内海に入った磐余彦の船団は、直接大和を目指すのであれば東進するはずだが、船団はそれとは逆に西に向かい、関門海峡を越えて響灘に出て、遠賀川の河口にあった岡（遠賀）に寄っている。その理由は一体何であったのか。遠賀川は明治30（1897）年頃には7千艘の川船が活躍していたという。古代にあっても水運の要衝であったことは間違いのない。遠賀川の河口は玄界灘沿岸の東部地域に属し、後に宗像神社を奉祭する地域で出雲の勢力とも親しい関係にあった。そのような場所に船団が寄り道をしたのは、当初磐余彦一向は日本海沿いに東征することを考えていたが、出雲勢力の協力が得られず、やむなく引き返して瀬戸内海ルートを進んだというような事情があったのではなかろうか。

また記紀ともに宇佐、筑後、安芸、吉備を経由し、難波に至る路程は共通だが、水先案内人のシイネツヒコ（『日本書紀』では椎根津彦、『古事記』ではサオツネヒコ（槁根津比古））と出会う速吸門の位置が大きく異なっている。『日本書紀』では東征が開始されて直ぐ（豊予海峡と推定される）、『古事記』では畿内に入る時点（明石海峡）に設定されているのだ。遭遇の場所はともあれ、ここで注記すべきは、磐余彦の一团が海民の協力を得たということである。釣りをしていた男（「紀」によれば漁人）が求めに応じて水先案内人となるが、漁民が簡単に航海民に早替りし、その逆も一般的であった当時の様子が窺える。古代においては航海民と漁民を峻別することは困難であり、海民の中での航海民と漁民の間はきわめて流動的であった²⁰⁾。

磐余彦らの水先案内役を務めた椎根津彦は、倭氏の祖先とされる。倭氏は中流豪族ながら、「大倭（やまとの）国造」の地位にあり、大和（おおやまと）神社の祭祀を担当した。大和神社の祭神は大和国の守り神である倭大国魂神（やまとおおくにたま）で、4～5世紀の大和王権は、大神（おおみわ）神社、石上神社と並んで大和神社の3社を重んじており、王家の祭祀に欠かせない神であった。倭氏が国魂の祭り手とされたことは、大和の建国期、シーパワーの担い手である海民の立場が評価されていたことを示すものといえよう。ちなみに、大和神社は、日本海軍の戦艦大和の守り神でもあった。

次の疑問は、河内から一旦南下した磐余彦らが、奈良への進出距離が短く移動も楽な紀ノ川流域を通らず、なぜ和歌山平野からわざわざ熊野にまで大きく迂回したのかという問題だ。恐らく弥生社会を形成してきた和歌山平野・紀ノ川流域の人々や集落指導者が磐余彦の集団を警戒し、排除したためであろう。紀元前1世紀～紀元2世紀の弥生中期には、瀬戸内と大阪湾岸に多数の高地性集落の分布が認められる。大きく南に迂回しないと、強い抵抗を受けることなく大和へ進出できる経

路が見出せなかった可能性を指摘したい。東征の時期は、中国史書に見える「倭国大乱」の時代であったのだ。

だが、これと別の見方も可能だ。大阪湾までの記紀の記述は、長い年月を鳥瞰的に描いているが、大阪湾に入ってから大和に進むまでは日々の動きの日単位の記述になっている。つまり、大阪湾まではタイムスケールの長い話として進行するが、そこから先は日々の動きが描かれている。この違いは何か？紀伊半島を南下したのは、台風や嵐等の悪天候で船が流されたためではなかろうか。海岸に着いた時の記述の様子が、漂流遭難の様子を暗示しており、瞬間的で劇的な危機的体験が子孫に語り継がれたのではなかったか。そしてこの時、遭難しかけた磐余彦を助けた一群の海人や半島人が、記紀にその名の残すことになった。

●大和の先住勢力

大和に先に降った天神の子饒速日は大和の土豪長髓彦の妹を娶り、当初は長髓彦と共に磐余彦の進出に抗した。だが、磐余彦と饒速日は互いに天神の子であることを認め、結局、饒速日は長髓彦を殺して磐余彦に降伏した。この饒速日は物部氏の遠祖であるという。物部氏は、皇祖神を除いて「天孫降臨」「国見」の逸話をもつ唯一の氏族である。『日本書紀』によればその遠祖は、イザナギ、イザナミの子アマテラス系ニギノミコトの兄「ニギハヤヒノミコト（饒速日命）」とされ、神武天皇東征時以前に既に河内国河上哮峰（いかるがのみね）に「天磐船」に乗って天降り、大和の鳥見白庭山に遷ったとされる。

物部氏が残した『先代旧事本紀』によれば、物部氏の本拠は九州であったという。確かに、畿内の地名と同じ読み方をする地名が九州北部に多い。しかも共通する地名を冠した物部氏の名前が多数存在し、彼らの名前が『先代旧事本紀』に記されている。鳥越憲三郎氏の研究などを見ると、ニギハヤヒに供奉した物部一族の氏族名は、遠賀川流域の地名と偶然とは思えないほどの数で一致する。恐らく物部氏は九州遠賀川流域から日本海側（出雲）を經由して丹後に入り、生駒の西の日下（草香）から大和川流域に展開したのであろう。大王家と同じく天神の子とされる物部氏だが、大和先住民である出雲勢力との関係が深い。また同じく遠賀川流域を拠点とする海民の宗像氏とも古くから接触があったと思われる。宗像は後に、朝廷の半島出兵の過程で、水軍として活躍する。ニギハヤヒやイワレヒコ（神武）の東征は、稲作先進地域で人口増となった九州から、新たな稲作の新天地を求めて東へ移動していった弥生期民族移動の歴史の反映と考えることができる。

大王家に先行して畿内進出を果たしていた出雲や丹後などからの日本海勢力（饒速日一族）は、ヤマトオオクニタマ（倭大国魂）や大物主を祭り、三輪山をその御神体として崇めてきた。三輪山の祭神、オオモノヌシ（大物主）は、オオクニヌシ（大国主）でもある。九州や吉備からの流入勢力は、この物部系先住勢力を抑えつつも融和と協調の体制をとった。先住出雲勢力の神＝国神を祭り、崇りを避けることで、日向大王家は先住出雲物部勢力との融和に努めた。そして、既存の神と併存させる恰好で、新たに自分たちの天照を三輪山に持ち込むのだが、融和は容易ではなかった。

『日本書紀』によれば、崇神天皇（御間城入彦）の5年、国内に疫病が蔓延し、民の半分が死亡するほどであった。翌年には百姓の多くが流離したり反逆し、国内が乱れた。そこで天皇は天照大御神と倭大国魂の二神を御殿内に合祀するのを取りやめ、天照大御神を（トヨスキイリヒメノミコト）（豊楸入姫命）に託して笠縫邑に祀り、倭大国魂をヌナキイリヒメノミコト（淳名城入姫命）

に託して祀られた。しかし、淳名城入姫命は髪が落ち、身体が痩せてお祀りすることができなかった。そこで再度占いをしたところ、大物主神が倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトヒモソヒメノミコト）に神懸りして、「吾を我が子、大田田根子に祀らせたなら、たちどころに国が収まるであろう」と告げた。また別に大和国魂神をイチシノナガオチ（市磯長尾市）に祀らせたらいと知らされ、天皇はさっそく大田田根子を探しだし、大物主神を祀る祭主とし、市磯長尾市を大和国魂神の祭主としたところ、疫病は止み国中がようやく収まったとある。

このことは、実際には御間城入彦（日向大王家）が畿内に持ち込んだ天照信仰と土着の大物主・大和国魂信仰（三輪山信仰）の葛藤の様を描くもので、先住民との融和を図るために多くの困難があったことを暗示している。饒速日の子孫とされる物部氏と大王家とは、3世紀半ば大和王権の発生時から祭祀を通じて密接に繋がっており、5世紀になると、物部氏は大伴氏と並ぶ武門として朝廷に仕える。

[注釈]

- 1) 「国生み神話では、豊かにして広大な農耕地の広がる平野単位ではなく、ひとまず豊秋津洲を別にすると海上交通によって結ばれ海上交通の拠点となった洲（島）を対象にしていることは明かである」森浩一『日本神話の考古学』（朝日新聞社、1983年）22頁。
- 2) 大林太良『日本神話の起原』（徳間書店、1990年）25頁。
- 3) 日本神話では、天上、地上のほか、黄泉、根（日本書紀では「根国」、古事記では「根堅州（カクス）国」、常世、綿津見の四つの世界が存在している。黄泉と常世は死の世界、生きて帰れるのは根の国と綿津見の国。
- 4) 大林太良、前掲書、90頁。
- 5) 「海岸に立つと、水平線で海と空とが分かれているありさまが眺められる。しかし、水平線が、はっきりみえずに、海と空とがつながったように感じられることのほうが多い。そこで、古代人は海と空とをあわせたものを「あま」といった。それゆえ、「常世国」は海の彼方であるが、そこは実は空なのかもしれない。このように古代人は海のはても空も、ともに未知なる世界とみたのだ。海を照らす神は「あまてらすかみ」になる。・・・中国的発想を学んだ七世紀になると、日本人は、ようやく空と海とは別のものだと考えるようになった。そこで、「何もない」意味をもつ「そら」の語が、「空」をあらわすようになった。今でも「そらとほける」、「そらみみ」といった語がある。そして、「多くの水」の意味をもつ「うみ」の語が新たにつくられた。」武光誠『大和朝廷は古代の水軍がつくった』（JICC出版局、1992年）8～9頁。「イザナキ・イザナミ系の神々は、みな海と深くつながっている。たとえばアマテラスは太陽神であるから高天原と呼ばれる天上界に住んでいる。しかしこの神も、その誕生の際は海である。アマアラスの誕生については二通りの伝承があるが、どちらの場合も海辺であることに変わりはない。一つはイザナキ・イザナミが、オノコロ嶋で国土・万物を生んだあと、最後に月神ツクヨミやスサノヲとともに、姉弟として生んだとするもので、海中ではないが、潮の香がしみ込んだ海辺で生まれている。もう一つの伝承では、イザナミのいる黄泉の国から逃げ帰ったイザナキが、海辺の河口で襖をして左目をすすいだ時、生まれたとするものである。誕生の地を原点だとすれば、この神の原点は天ではなく海にある。」溝口陸子『アマテラスの誕生』（岩波、2009年）108頁
- 6) アマテラスは本来男性神であったが、壬申の乱の際の加護によって、天武持統朝の時代、持統天皇のイメージと重ね合わせる形で女性神たる皇祖神とされ、伊勢神宮で祭祀されるようになったとの説もある。アマテラスが孫のニニギに皇位を譲っているのは、持統天皇が孫の軽皇子を即位させた（文武天皇）史例の投影とす

- る。上山春平『神々の体系』（中央公論新社、1972年）137頁、筑紫申真『アマテラスの誕生』（講談社、2002年）264頁。
- 7) 大林太良『日本神話の起原』（徳間書店、1990年）、110、128頁。
 - 8) 瀧音能之『伊勢神宮と出雲大社』（青春出版社、2010年）178頁
 - 9) 新谷尚紀『伊勢神話と出雲大社』（講談社、2009年）、144頁以下。
 - 10) 恵美嘉樹『日本の神様と神社』（講談社、2009年）37～40頁。
 - 11) 大林太良『海の道 海の民』（小学館、1996年）133～4頁。
 - 12) 古代史研究者の岡正雄（おか・まさお）はタカミムスビのほうを皇室本来の祖神とし、アマテラスオオミカミを後から融合した南方の農耕稲作と関係した太陽女神としている。岡正雄の仮説は江上波夫らの『北方騎馬民族征服説』を前提としたもので、現在では史実性は否定されているが、タカミムスビを北方アジアの天神の男神とし、アマテラスオオミカミを南方アジアの農耕・太陽神の女神とし、元々は二系統の別の神話だったものが歴史的過程で融合したのではないかと推測される。溝口睦子氏は、登場人物が自由奔放に活躍する多神教的な南方系神話よりも、王の出自が天に由来することを語る北方系の天孫降臨神話の方が王権の唯一絶体性や至高性をアピールする点で優れていることから、豪族の連合体から抜けだし統一王権を目指す大王家は、専制王権が依拠する思想として、高句麗の建国神話を採り入れたとする。溝口睦子『アマテラスの誕生』（岩波書店、2009年）38～40頁。つまり、海の彼方から王統が来る水平的海洋民的な信仰が、垂直的大陸民的な信仰へ、あま（海）からあま（天）への変化である。
 - 13) 大林太良編『日本の古代3 海をこえての交流』（中央公論社、1986年）13～4頁。
 - 14) 中村明蔵『隼人の古代史』（平凡社、2001年）244頁以下。
 - 15) 森浩一、『日本神話の考古学』、142～3頁。総括的な海神がワタツミの神であるのに対して、シオツジノオジは航海神といえる。
 - 16) わが国では、古代から、「ワタツミの神」が海神であり、海のすべてを司っている神とされている。もう少し細かくみると、記紀では、海の神は、イザナキノミコト、イザナミノミコトの二神の御子で、オホワタツミノカミ（大綿津見神）という御名であるとされている。その次に、ソコツワタツミノカミ（底津綿津見神）、ソコツツノヲノミコト（底筒男命）、ナカツワタツミノカミ（中津綿津見神）、ナカツツノヲノミコト（中筒男命）、ウハツワタツミノカミ（上津綿津見神）、ウハツツノヲノミコト（上筒男命）の六柱の神があらわれる。即ち、大綿津見神を含めた七柱の神々が海の神として現われており、アヅミノムラジ（阿曇連）が三柱のワタツミノカミを祖神とし、ソコ、ナカ、ウハのツツノヲノミコトの3柱が住吉の祖神とする。
 - 17) 記紀では、「阿多隼人」と「大隅隼人」に区分され登場する。例えば、日本書紀には、阿多隼人と大隅隼人が天覧相撲をして大隅隼人が勝った、という記述がある（※3）。これは史書における相撲の最初の記述であり、相撲の起源の一つは南九州にあるのである。今でも鹿児島では神事としての相撲がとても盛んで、夏祭りでは綱引きと相撲がよく行われるし、金峰町の錫山相撲などは350年以上の歴史がある。この阿多隼人と大隅隼人は、古代に畿内へ大量移住しており、今でも畿内には鹿児島に因む地名がある。例えば、奈良県五條市の阿陀（あだ）は阿多に起源を持つと言い、京都府京田辺市の大住（おおすみ）では大住隼人舞という芸能も行われている（近年復活させたもの）。畿内隼人は律令制の中で「隼人司（はやとのつかさ）」という機関に所属せられ、歌舞などの芸能や竹製品の製造を担当した。また、天皇一族の護衛（近習隼人）や御陵の警護、そして殯（もがり）の儀礼にも参加させられたという。これらは隼人の持つ呪能を期待したものだったらしい。どうやら、古代において隼人というのは、神秘的な力を持つ民族と捉えられていたようだ。
 - 18) 縄文時代後期の市来式土器は、海洋に進出し積極的に交易活動に携わっていた隼人の手で広められたと考えられる。市来式土器の分布を見ると、北は四国の愛媛から、長崎、熊本、東は宮崎、南は種子島・屋久島などを経て奄美、琉球へと広がっている。隼人が高度な航海技術を身につけていたことの証拠といえる。大林太良

他『海と列島文化5 隼人世界の島々』（小学館、1990年）64頁。

19) 大林太良編『日本の古代8 海人の伝統』（中央公論社、1996年）26～9頁。

20) 大林太良編、『日本の古代8 海人の伝統』、217頁。